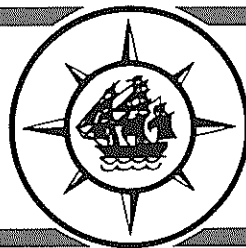


Operation Raleigh News



Operation Raleigh

ADENSO

No.11

昭和60年(1985)8月5日(月)
毎月1回発行●発行所 オペレーション・ローリー日本委員会
〒104 東京都中央区築地1-7-10 築地オーミビル502号
電話 東京(03)544-7413

●このオペレーション・ローリーニュースは日本電装株式会社のご協力で制作されたものです。

東京・大阪で第2次審査

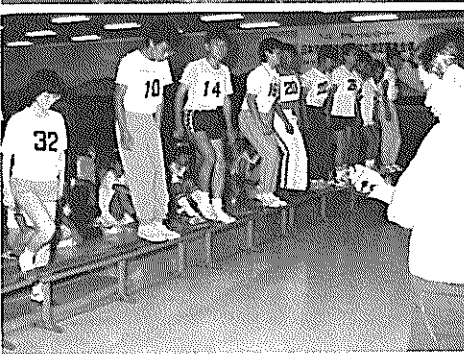
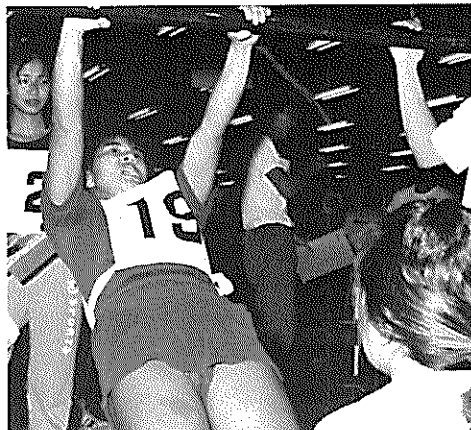
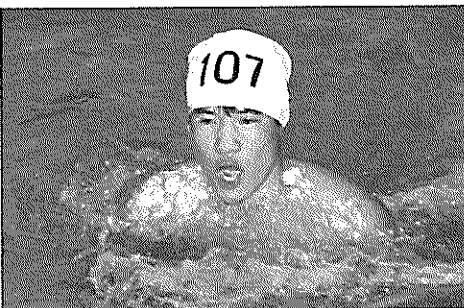
体力・泳力にチャレンジ



1985年次OR日本代表派遣青年の第2次審査が7月7日(日)東京・高田馬場ビッグボックス、7月14日(日)大阪・千里セルシーで行なわれました。第1次書類選考に合格した512名(男性282名、女性230名)が参加。両会場とも午後1時から体力測定(踏台昇降、反復横跳び、懸垂、立位体前屈、立幅跳び)を実施しました。

また2時から泳力測定。自由型で5分間に何メートル泳げるかを測定しました。

この体力・泳力測定に合格した応募者は8月24日・25日(那須国民休暇村)または8月31日・9月1日(滋賀県朝日の森自然研修所)での第3次審査に参加し、英語力、面接テストなどに取り組むことになっています。

ボリビア・ペルーに
相次いで6人飛び立つ

1984年次OR日本代表第7陣として、菊地孝範君、新保陽子さんの2名は、7月1日(月)成田発JAL423便で、ロンドンに飛び立ちました。2人は、南米ボリビアでのフェイズに参加するもので、ロンドンで各国の参加青年たちと合流し、現地に向かいました。

さらに第8陣として、ペルーフェイズに参加する原田亜紀子さん、細田香納美さん、石本一鶴君、大塚洋君の4名は、7月9日(火)成田発のJAL423便で、第7陣と同様ロンドンに向かいました。4人はロンドンで各国の参加青年たちと合流、スペイン、プエルトリコ、コロンビアなどを経由して、7月13日にはペルーのリマに到着しました。リマではユースホステルに4日間ほど滞在した模様です。原田さん、細田さんの2人は、英国からの参加女性たちのパワーにびっくりしているということです。また、石本君は、「リマの街を歩いて、はじめてORに参加している実感がわいてきた。貧しいけれども愛すべき人々の多い国だと思う」と伝えてきました。



オペレーション・ローリーシンポジウム'85「文化を見る目」

「異文化理解」に新しい視点を 400名の聴衆集める

オペレーション・ローリーシンポジウム'85「文化を見る目」は、7月23日(火)東京・プレスセンターホールに400名の聴衆を集めて開催されました。ORJCと朝日新聞社の主催、国際青年年事業推進会議、外務省、英国大使館の後援、日本電装の協賛で行なわれたものです。

シンポジウムの総合司会は筑紫哲也氏(朝日ジャーナル編集長)。主催者開会あいさつに引き続き、午前中は、フォーラム「体験の図式」という形で、永井道雄ORJC委員長の講演「オペレーション・ローリーの今日的意義」と中沢新一氏(東京外大助手)をオブザーバーに迎えてのOR参加5青年の体験報告が行なわれました。

午後からは、山口昌男氏(東京外大教授)の問題提起「文化を見る目」をテーマとして、矢野暢氏(京都大教授)、並河万里氏(写真家)をまじえてのパネルディスカッションが展開されました。

さらに休憩後、陳舜臣氏(作家)の特別講演「文化を見る」が行なわれ、歴史の流れを例にとりながら、文化を読み取る能力を身につけることの大切さや誠実で丁寧な国際交流の必要性が語られました。

シンポジウムは、牧野勇治ORJC事務局長の閉会あいさつで無事終了、ほぼ予定通り6時間30分におよぶ充実した内容でした。とくに、「文化」についての定義から始まり、「異



文化理解」への態度、あり方に至るまで多くの聴衆に新しい視点を提示したものと思われます。この模様は7月29日付の朝日新聞紙上でも紹介されました。

ORシンポジウム ドキュメント

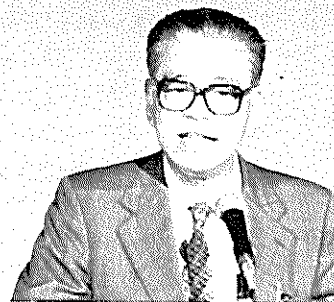
〔午前8時〕 まぶしい夏の朝日がプレスセンタービルを照らす。装飾や演出担当スタッフが集まり、10階のホールへ。ホールでは音響・映像のテスト・リハーサル。演出チーフの声がホールに響く。

〔午前9時〕 司会の筑紫さん、永井ORJC委員長、中沢さん、白井朝日新聞編集局次長らが続々と会場へ。OR参加青年の桃井君、伊藤さん、戸崎君、勝間君、岸田さんを加えて、別室で打合せ開始。5人の青年はやや緊張気味。筑紫さんや中沢さんは軽いジョークを飛ばし、5人

の緊張も次第にやわらぐ。

〔午前10時〕 いよいよシンポジウム開会。 Horizont に波のイの映像。ORの概要を紹介するイントロが始まる。場内が明るく朝日新聞編集局白井次長の開会あいさつ。要旨は異文化を知る手でもっともチャンスが少ない接することを身をもって体験年たちの報告を楽しみにしていた内容。第1セッション委員長の登場で自身の海外留

▼永井道雄ORJC委員長



シンポジウムで体験を報告した参加青年にインタビューした。

——「体験の図式」に出演したみな感想をもちましたか？

桃井 もう少し時間が欲しかった。緊張がとれたあたりで終わった感じ。

伊藤 自分の考えをうまく発言できなかった。筑紫さんにズレた答えをしたのに、フォローしてもらい助かった。

戸崎 考え方の未熟さを痛感くり考えなおしたい。

勝間 帰国直後で、整理が



「体験の図式」で報告する5青年(左から桃井君、伊藤さん、戸崎君、勝間君、岸田さん)

をまじえて約30分間の講演だった。永井委員長は異文化との交流に積極的なことは大切だが、しかし用心ぶかさも同時に必要なこと、匹夫の勇をいましめる発言もあった。

引続き、筑紫氏の司会、中沢氏のオブザーバーで、OR参加青年の体

▼中沢新一 東京外語大助手



験報告。5人の参加青年の活躍ぶりを紹介したスライド上映のあと、ひとりずつ体験を報告しながら、司会と中沢氏が発言するというスタイルで進行。5青年の冒頭の発言は次のとおり。

桃井君：海外に出て、自分が日本のことを十分知っていないことに気づいた。

勝間君：日本の文化を相手に知らせる努力が大切だと痛感した。

岸田さん：日本人の生活環境は人工的につくられすぎていると感じた。

▼筑紫哲也 朝日ジャーナル編集長



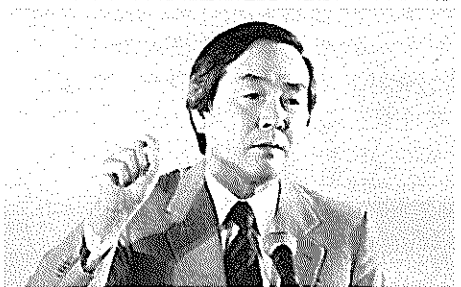
伊藤さん：日本人は自己主張が少なすぎると思った。

戸崎君：若者同士には共通の文化があるようにも思った。

このフォーラムで中沢氏は、自分の心を触発する旅として、OR参加青年たちにすがすがしい青春を感じると発言していた。また司会の筑紫氏は、海外へ出る意味は、日本のことを知らない、という事実を思い知ることでもあり、「文化を見る目」に定形的な結論はないだろう、と語り、締めくくりとしていた。

〔午後1時〕 筑紫氏の司会、山口氏、矢野氏、並河氏によるパネルディスカッション。山口氏は「文化」とは生活体験の容器であるとし、

▼山口昌男 東京外語大教授



▲矢野暢 京都大教授

自身の異文化体験をまじえて、異文化理解には自己破壊を恐れない意志が心要と発言。矢野氏は、異文化理解の目的について、自分を見つめること、世界観を限りなくグローバル



▲並河萬里氏(写真家)

なものにすることで、相互の文化を尊厳することと指摘した。また、並河氏は、写真家の立場から「異文化に対する自意識」をどのようにつくりあげていくかを、実体験から発言した。話題は世代間の異文化、仏教美術の見方、農耕文化と遊牧文化、技術文化の限界など多岐にわたった。最後に旅は異文化を発見する手段でそれに触発され自分を変えることの大切さが訴えられ2時間半のディスカッションは熱っぽく終了した。

〔午後4時〕 陳舜臣氏の特別講演は「文化を見る」。作家の鋭い視点からの数々の発言は、聴衆の興味をそそった。クーラーがよく効いていても、ステージのライトのためか、陳氏は額に汗びっしょりの熱演。後半には眼鏡を外しての、話しぶりに400名の聴衆はひきこまれるように聴きいていた。

▼陳舜臣氏(作家)



5人の青年に感想を聞きました。



桃井君



伊藤さん



戸崎君



勝間君



岸田さん

ないので、出演して考えをまとめる機会となった。

岸田 「文化を見る目」と関連して深く考えていないので、まとまりのある発言ができなかった。

——シンポジウム全体で印象的だっ

たことは何ですか？

桃井 著名な方の貴重な体験がじかに聞けたこと。

伊藤 パネルディスカッション。自分の体験と照らし合わせて聞くことができた。

戸崎 文化の同一化という視点で、自分の見解とは違った中沢さんのアメリカナイズという認識は勉強になった。(バハマの若者と日本の若者の聴いている音楽が同じだということは世界の若者文化の同一化現象であり、異文化をあまり感じなかったという戸崎君の発言に対して中沢氏がそれはアメリカナイズされているということではないかと発言した場面のこと)

勝間 自分の体験を伝えることのできる場が与えられたことがうれしかった。

岸田 シンポジウムに出て、文明社会に復帰できたことと実感したこと。

日本代表派遣青年のページ

ボリビアから第1信

楽しい農場・食事に不満

ボリビアでキャンプ生活をはじめて1週間になります。ボリビアの選挙の関係でアンボロ国立公園にはまだ行けません。アンボロへ行くのは1週間後ぐらいになる予定です。私たちのフェイズは、とても小さく英国人13人、米国人4人、豪州人1人、ニュージーランド人2人、ボリビア人6人、そして日本人2人の計28人です。

いまキャンプしているところは、サンタクルーズから65マイル離れたカプリコーニアという農場です。牛、馬、ニワトリなどがいて、のどかです。水もふんだんにあるし、天気もいいし、仕事も楽で、ホリデーという感じです。主な仕事はブタにエサをやったり、鳥の観察をしたり、ニワトリの小屋を建てたりといった毎日です。

昨日の日曜日には、この村の青年たちとORチームがサッカー試合を

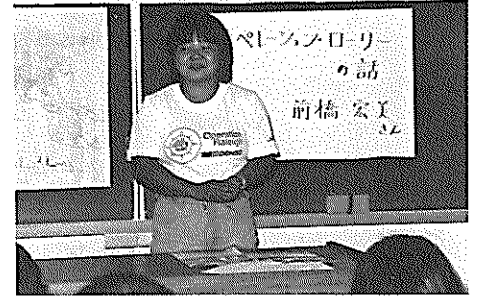
やりました。ORチームは強く、菊地君もアメフト風のサッカーで活躍しました。

このキャンプにも、不満はあります。食事のことです。朝はポーリッジというおかゆの遠縁のようなもの、昼夜はシチューなど、とてもおいしいのですが量が少ないことです。いま、ちょうど食糧がつかかかっている、この2～3日、肉類はムリでしょう。みんな「もっと欲しい。おなかですいた」とブーブーいっています。私はちょっと足りないかな、という程度ですが、死ぬほどチョコレートとアイスクリームが食べたいです。甘いものが欲しくて、つついコーヒーに砂糖をたくさん入れてしまいます。アンボロに行けば、いろいろなプロジェクトもあるようですし、こんな怠惰な生活はなくなると思います。

英語のほうは、わからないところもあるけれども、まわりが教えてくれますので大丈夫です。菊地君もなかなかのものです。彼はボリビア人と仲がよく、彼のスペイン語はとてもうまくなっていると思います。

(カプリコーニアにて、新保陽子)

前橋さんORを講演 ザ・ワールド・セミナー



コスタリカフェイズに参加し、5月30日(日)に帰国した前橋宏美さんは、7月6日(土)「横浜I Y Yザ・ワールド・セミナー」で1時間にわたりオペレーション・ローリーについての講演を行ないました。ポスターや募集要項を持ち込んで、中・高校生たちを前に熱弁をふるいました。ORは高校生以上に強い関心もたれたようです。

また、コスタリカ現地で参加したコスタリカのORメンバーが7月18日から8月2日まで日本に滞在しましたが、その間前橋さんも同行。「国際青年の村」などに参加しました。

コスタリカでの反省点は、やはり第一に体力不足があげられる。首都サン・ホセに到着した翌日から、私たちは熱帯雨林に入りキャンプ地作り精を出した。真冬の日本から真夏の中米へ、都会生活から自然の中へ急に飛び込んだため、とまどうことが次々にあり、また私の体力不足はそれに拍車をかけた。毎晩、嵐のように雨が降り、どろどろにぬかるんだ山道を、大きな鉄骨を5～6本かついで登り降りしたり、穴を掘ったり。根性を出してがんばっても、次第に皆についていけなくなり、見兼ねた仲間が代ってくれる、という状態が続き、結局は仕事にあぶれることが良くあった。元気をなくしてうなだれていた私の横を、もくもくと働く山内くんが通っていく。ああもっと体力があったらなあ、と悔しく思った。

出発前、山内くんはジョギングなどを通じて体力をつけ、私は英語に重点を置いた。その差は歴然とした。たとえば英語による指示がわかっても身体がいうことを聞かなければ、何

OR参加青年 リレー・レポート 《第4回》



体力&スペイン語 コスタリカでの反省点

1984年次第4陣 前橋宏美

にもならない。わからない、と言えは必ずゆっくり教えてくれる人がいるし、それでもダメなら、まわりを見回して状況把握することもできるのである。体力さえあれば…。

しかし、だからといって常に落ち込んでいたわけでもない。できる限りのことはやったし、少しずつ様々なことに挑戦していき、最後には皆と全く同じ作業を笑顔でこなせるようになった。結果はどうあれ、必死でがんばってれば認めてくれるのである。仲間は常に「力には個人差

があるのだから、一生懸命やってもダメなら、気にするな」と励ましてくれた。体力不足に悩み、ひとりキャンプで留守番していた時も、「誰かがやらなくてははいけない仕事だから」といって勇気づけてくれた。

第二には、スペイン語を習得していかなかったことである。全てのプログラムは英語だがやはり現地の言葉は必ず学ぶべきであった。海外へ出かける際はそれを鉄則としていた私も、今回ばかりは卒業試験の準備等で時間に余裕がなく、スペイン語は一つの単語さえ知らずに発ってしまった。滞在中、コスタリカ人を通じて少しずつ学んだが、もっともって知っていたら、月夜の晩、炎を囲んで歌った後に、じっくり語り会えたかもしれないし、コスタリカという国を深く知ることができたのではないかと残念に思う。また再び会う時は互いの言葉の達人になって、と言いつつ空港で別れた友人達の顔は、今でもなつかしく思い出す。今度こそ……。